# 第41回
# 青森県少年の主張大会報告書

# 青い雲

主催：青少年育成青森県民会議　国立青少年教育振興機構

# 目　次

■第41回「青森県少年の主張大会」概要 ……P2

■主催者挨拶…… P3

■来賓祝辞 ……P4

■発表 ……P5～P12

■講評 ……P13

■第41回「青森県少年の主張大会」実施要綱 ……P14

■講演（要旨）…… P15～P16

■紹　　介

第41回少年の主張全国大会～わたしの主張 2019 ～ ……P17～P21

●内閣総理大臣賞受賞作品

●文部科学大臣賞受賞作品

●国立青少年教育振興機構理事長賞作品

●審査委員会委員長賞作品

●審査委員会委員長賞作品

第41回少年の主張全国大会開催要綱 ……P22

# 第41回「青森県少年の主張大会」概要

■次　第

1　開　会

主催者挨拶　　青少年育成青森県民会議会長　　橋本　都

来賓祝辞　　青森県教育委員会教育長　　和嶋　延寿

2　発　表（発表順）

| | | |
|---|---|---|
| こんなときこそ | 青森市立西中学校 | ２年　大水　太朗 |
| 生きている幸せ | 階上町立道仏中学校 | １年　東野　愛 |
| 人を変える勇気 | 青森市立南中学校 | ３年　日野　木乃葉 |
| 命 | 弘前市立船沢中学校 | ３年　小山　愛依 |
| 共に生きる社会を | 青森市立浦町中学校 | ３年　佐藤　光璃 |
| 自由とは | 階上町立道仏中学校 | ３年　幸田　萌愛 |
| 私は「生きる」 | 青森市立東中学校 | ３年　山本　成 |
| 本当のかっこよさ | 今別町立今別中学校 | ３年　相内　蓮 |

3　講　演（要　旨）

「輝く君のために」

講師　シンガーソングライター＆プロデューサー　桜田　マコト　氏

4　表　彰

最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名

5　講　評

青少年育成青森県民会議　青少年専門指導員　三上　真広

6　閉　会

■審査員

| | | |
|---|---|---|
| 青森県ＰＴＡ連合会 | 会長 | 外﨑　浩司 |
| 青森県中学校長会 | 幹事・対策委員長 | 笹　弘道 |
| 青森県青少年・男女共同参画課 | 課長 | 松岡　浩美 |
| 青森県教育庁学校教育課 | 主幹 | 伊藤　哲也 |
| 青少年育成青森県民会議 | 青少年専門指導員 | 三上　真広 |

# 主催者挨拶

青少年育成青森県民会議
会長　　橋本　都

みなさん、こんにちは。
「第41回青森県少年の主張大会」の開催にあたり、
一言御挨拶を申し上げます。

本日は、青森県教育委員会教育長様をはじめ御来賓の皆さまには、
お忙しい中、本大会に御臨席を賜り、まことにありがとうございます。
この大会は昭和54年の国際児童年を記念し開催され、これまで数多くの中学生や大人が参加し、中学生のみなさんからたくさんのことを学んできた大会であり、毎年順繰りに県内各所で開催しております。

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み環境がめまぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他人を思いやる心を持ち、社会的に自立できるよう、健やかな成長が求められています。
そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張大会は、子供たちにとってこれからの契機となることを願い実施するものです。
本日は、原稿審査で選考された８名の中学生が様々なテーマで主張発表を行います。中学生の皆さんがどんなことを考え、どんな意見を聞かせてくれるのだろうかと私も大変楽しみにしております。

本県民会議では、「育てよう　未来を見つめる　かがやく瞳」のキャッチフレーズの下、青少年育成県民運動を展開しておりますが、子供たちが夢や希望をもって生きていくことができるようにするためには何が大切なのか、この機会に参加者の皆さんにも、是非考えていただけたらと思います。

また、本日は主張発表の後、シンガーソングライター＆プロデューサーとして御活躍の桜田マコトさんに「輝く君のために」と題した御講演をいただくこととしております。

本日は、青森市立浦町中学校から生徒の皆さんに多数御参加を頂いておりますが、中学生は、小学生時代と違い学習内容や活動範囲が広がり、広く地域のことについて学んでいることと思います。スポーツや課外活動に打ち込んでいる人もいるでしょう。中学校の３年間は、多様な人々との関わり、つながりの中で自分を形作り、心身ともに大きく成長する、人生の中でもかけがえのない時期です。この大会が、いろいろ考え行動する機会に繋がることを期待しております。

最後になりますが、大会開催にあたりまして御協力をいただきました関係者の皆様に心より感謝を申し上げ、挨拶といたします。

# 来賓祝辞　　青森県教育委員会教育長

伊藤学校教育課長代理　代読

第41回「青森県少年の主張大会」の開催にあたり、
一言お祝いの言葉を申し上げます。

本日第41回「青森県少年の主張大会」が、多くの方々の御参加のもと盛大に開催されますことに対し、心からお喜び申し上げます。

また、昭和54年の「国際児童年」から、長年にわたり本大会の開催に御尽力されている青少年育成青森県民会議の皆様に対し、深く敬意を表します。

さて、青森県教育委員会では、施策の方針として、「郷土に誇りを持ち、多様性を尊重し、想像力豊かで新しい時代を切り拓く人づくり」を掲げ、「変化の著しい社会において主体的に判断し行動する力やコミュニケーション能力を身に付け、チャレンジ精神に満ちた人財の育成」等を目指して、教育施策を展開しているところです。

本大会は、中学生が日常生活の中で感じたり考えたりしたことを発表することにより、次代を担う青少年としての自覚と自主性を育てるとともに、同世代の意識の啓発や青少年の健全育成に関わる大人の青少年に対する理解と関心を深めることを目的として開催されていると伺っております。

これは、学習指導要領のねらいである「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」等の「生きる力」の育成に相通じるものであり、県教育委員会が目指す人財の育成に大いに資するものであります。若者の力を養うためのよい機会ですから、今後も多くの中学生に積極的に参加してもらいたいと思います。

この後、県内各地から選ばれた８名の中学生が意見発表を行いますが、同世代や大人に対して、自分の心の中の様々な思いを、自らの言葉でしっかりと伝えることは、とても重要なことです。発表する皆さんには精一杯自分を表現することを、また発表を聞く中学生の皆さんには自分自身を見つめ直すよい機会と捉え、発表者の主張にしっかりと耳を傾けそれぞれの価値観を尊重し理解を深めることをお願いします。

さらに、次代を担う少年達が、どんな考えを持ちどのように未来へ向かおうとしているのかを、感じとっていただきたいと思います。

意見発表の後には、十和田市出身で県内外で活躍されているシンガーソングライターの桜田マコトさんによる「輝く君のために」という演題での御講演があると伺っております。桜田さん御自身のこれまでの経験から、少年が夢や志を実現するための考え方や取組みなどについて、とても有意義なお話が聞けるのではないかと思いますので、今後の生活に活かしてほしいと思います。

結びにあたり、県内全ての青少年の明るい未来、そして本大会の成功を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 【最優秀賞】

# 私は「生きる」

**青森市立東中学校　３年　山本　成**

「なる、お花あげないの?」
大勢の人がきれいなお花をもって、父を囲んでいました。
父は、真っ白なお花に囲まれて、棺桶の中にいました。
世界でたった一人の父と、最後のお別れをしたあの日、私は、小学二年生でした。

父は、土木関係の会社を営む社長でした。仕事に熱心で働き者でしたが、気が荒く、家では母に声を荒げ、時に暴力を振るうことも少なくありませんでした。しかし、まだ幼かった私には優しく、母や姉たちをかわいそう、なんとかしたい、と思いながらも、私にとっては大切な存在でした。

時が経ち、私は中学生になり、母達の心の傷も癒え、悲しみから立ち直ったころだろう…と、世間の人は思っていたことでしょう。

しかし、私の心は、まるで正反対でした。思春期になり、小さなことで落ち込むことが増え、いつしか負の感情に陥っていました。

父の暴力、そして、早すぎる死。父の代わりに会社を切り盛りして忙しい母。自立して家を離れた姉たち。どうして私の家族はみんなと違うのか…と、日に日に寂しさが募りました。なぜ人には、始まりと終わりがあるのか。生きる理由は何なのか。考えれば考えるほど孤独を感じて「現実から逃げ出したい」、「死んでしまいたい」と思ったことさえありました。

でも、死ぬことはできませんでした。なぜなら、大切な人たちの顔が思い浮かんだからです。私が心を閉ざし、何度倒れても、こんな私を見捨てることなく、心配して声を掛け、一生懸命寄り添ってくれた友達、先生、姉、そして母がいました。その人達の思いを裏切ることはできない、私は、決して一人ではない…。ようやくそれに気づいたのです。

長く暗い、孤独なトンネルから抜け出した私は、「死」を見つめながら、同時に「生きる」ことを考えていました。何度も「死」を考えた私だからこそ、皆さんに伝えたいことがあります。

まず、あなたの周りに、元気のない人、ひとりぼっちの人、自分自身を傷つけている人、そして、「死にたい」とつぶやいている人はいませんか。思い当たる人たちに伝えます。決して、目を反らさないでください。その人は、たった今、あなたを必要としているのです。そのサインを、決して見逃さないでください。

今、心身共に元気な人も、いつ、どうなるかは分かりません。誰にでも、元気な時もあれば、心が弱り、自暴自棄になることもあります。でも、必ず、立ち直ることができるのです。そのためには、一人でも多くの人がその存在に気づき、声を掛け、時間をかけて、その人の「心に寄り添う」ことが必要です。誰かに大切にされている、という自覚があれば、人は生きる希望を取り戻せるのです。迷わず、ためらわずに、その人に伝えてください。

今、「死にたい」と考えている人に伝えます。自分を責めないでください。そして、辛いときは、誰かに頼ってください。あなたは、絶対に一人ではありません。必ず、あなたを大切にしてくれる人がいるのです。だから、絶対に命を絶たないでください。

未来は、変えることができます。「生きる幸せ」、「生きる辛さ」は、全て自分自身の成長と、人生のストーリーに大切なことなのです。

私も、いつか最高の人生だったと言えるように、「今」を、そして「これから」を大切にします。

最後に。ー天国のお父さん。お父さんのおかげで、私は強くなれました。大切にしてくれて、ありがとう。私は今日も、そしてこれからも、自分らしく生きていきます。

## 【優秀賞】

# 「共に生きる社会を」

**青森市立浦町中学校　３年　佐藤　光璃**

「隊形移動二回だけだったら、少ないし、見ている人、楽しくないじゃん。」

「隊形移動何回するって決まっているわけじゃないでしょ。

応援の練習時間足りてないのに、隊形移動増やす必要なくない?」

「うちは楽しい応援にしたいんだけど。」

「応援って楽しいだけじゃだめでしょ?」

私たちの学校では運動会で一年生から三年生までを色組に分けた縦割り応援があります。私は今年度色組応援団長になりました。応援練習を残すところ三回となった放課後、私は親友でもある応援団幹部と激しい口論になりました。その場にいた七人の幹部と先生がけんかの仲裁に入り、隊形移動は二回にすることで落ち着きました。運動会本番では皆が動きをしっかりと覚え、私自身も達成感を得ることができました。私も友達も良い応援にしたいという思いは同じだったのですが、練習の残り時間が少なくなったことから心に余裕がなくなりお互いに強い口調で言い合いになってしまったのでしょう。私はこのけんかをしてよかったと思います。なぜならば私も友達も本音を言うことによって相手の考えていることがわかり、最終的に納得のいく応援を創ることができたからです。また、直接相手の顔を見ながら話ができたので表情からもお互いの気持ちが理解できました。これがスマートフォンのメールでやりとりをしていたら、相手の言葉の調子や表情がわからないので誤解が生じ仲直りできないようなトラブルに発展してしまったかもしれません。

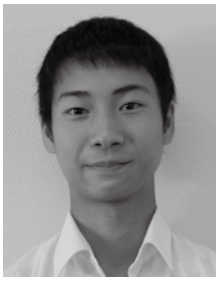
今年の五月末から六月にかけて痛ましい事件が発生し、ひとごととは思えない不安を覚えました。一つはスクールバスを待つ子どもや保護者十九人を殺傷するという事件、もう一つは元高級官僚の父親が長男を殺傷するという事件です。どちらにも共通しているのは社会や人間との関わりを断ち、引きこもりになってしまった中年男性にまつわる事件だということ。二人の中年男性は小・中・高校生時代に仲間同士でぶつかり合い、折り合いをつけ、認め合い、相手と一緒に何かをする喜びを感じる経験をしていたら、大人になってからも社会や人間と関わる必要性を感じ、このような事件は起こらなかったのではないでしょうか。困ったことにさらに現代の子どもたちは室内でのゲームやスマートフォンが中心の生活になり、仲間と一緒に何かをする機会が少なくなっているように感じます。

浦町中学校では地域とのつながりを深めるために、町会長さんとの話合いを行っています。その中で町会長さんから「以前は町会ごとの運動会があったり、夏休みには親子で海や山へ遊びに行ったものだが、今はそれがなくなり寂しい。」というお話がありました。昔は身近なところに親子が集まり、遊べる場があったのです。その遊びの中で子どもたちは様々な人と関わり、よいことをまねしたり、失敗したりしながら人との付き合い方を学んでいったのだと思います。

私は大人になったら、地域の夏休みの旅を復活させたいと考えています。これを実行するのはたやすいことではありません。だからこそ、今、中学校生活の中で積極的に人と関わり、人と協力する喜びをたくさん感じ、大人になったときに、その喜びを子どもたちに伝えたいです。運動会のときのように意見が対立することもあるかもしれませんが、くじけずに、そこから共に生きる力を身に付けたいと思います。皆が生まれてきたことが幸せだと思える社会を創るために。

【優秀賞】

# 本当のかっこよさ



今別町立今別中学校　３年　相内　蓮

かっこいい自分になりたかった。

天才科学者、メジャーリーガー、スーパーモデル。小さな頃は、憧れがたくさんあった。いつか僕も、かっこいい人になりたい。わくわくしながら、将来に思いをはせていた。

いつからだろう。勉強も運動も、人より劣ると思うようになったのは。小学生になり、同じ年の子達の中で、同じ勉強や同じ運動をするようになった。次第に、気づいた。思い描いたかっこいい自分になんて、僕はなれない。少しずつ、僕は周りに劣等感をもつようになった。

そんな中でも、一緒にいて心地よいと感じる子がいた。「T君」だ。T君とは、同じ学童保育だった。放課後、一緒に宿題をしたり、トランプで遊んだりした。

「いっしょにいると、たのしい。」

よくそう言って、T君はにっこり笑った。僕も、同じ気持ちだった。T君は、同じ学校で、同じ学年だった。でも、学級は違った。T君は、特別支援学級の子だった。その事を、僕はあまり気にしていなかった。T君は、T君だからだ。

小学二年生のある日。T君が、僕の学級に入ってきてしまった。間違いに気付いたT君は、慌てて教室を出ていった。そんなT君の様子を見て、周りから小さく笑い声が聞こえた。その声が聞こえた時、僕は、わざとらしく噴き出した。

「なんだぁ、あいつ!」

何でそんな事を言ったのだろう。周りの皆はどよめいた。一気にたくさんの視線が僕に集まる。胸がドキンと鳴る。初めて、皆が僕を見ているような気がした。

「僕、あいつの事、きらいだ!」

そう叫んで、僕は机に突っ伏した。ざわめきの中から僕の事を話題にしている声が聞こえた。頬が熱い。生まれて初めて目立っている。僕の胸は、高揚感でいっぱいだった。

その日から、僕はT君をからかうようになった。T君の耳元で、大きな声を出したり、T君の動きをまねしたり、色々した。そうする度、皆は僕を注目した。そうする度、T君は困った顔で僕を見た。けれど、やめようとは思わなかった。目立つためには、Tくんをからかえば良い。それが、その時の僕なりの「かっこよさ」だった。

小学五年生の春、僕に急な転校が決まった。それまでずっと、T君をからかい続けていた僕は、さすがに「T君に謝らなければ」と思った。放課後、特別支援学級をのぞくと、T君が帰り支度をしていた。すぐに駆け寄って頭を下げた。

「ごめん、T君。」

きょとんとしたT君は、すぐに笑った。

「ありがとう。でも、おこってないよ。」

昔と同じ笑顔。ゆっくりとした話し方。変わらないT君を目の前に、僕は胸が苦しくなった。

「いつも、ぼくをみて、わらってくれた。はなしかけてくれた。」

僕は、ぎゅっと唇をかんだ。それは、T君をからかってたんだよ。たまらなくなって、T君の手をぎゅっと握った。

「今まで、ごめん。本当の友達になろう。」

T君と、本当の友達になりたい。心からそう思った。でも、T君の答えは、ぼくの想像をずっと超えたものだった。

「いままでもずっと、ほんとのともだちだったよ。」

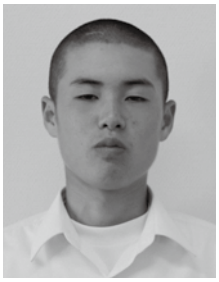
その時、初めて気付いた。本当のかっこよさ。それは、勉強でも運動でも、目立つことでもなくて、目の前の人を心から信じて、大切にすることなのだ。T君のように。

「ありがとう、ごめん。T君。」

あれから、四年。T君が教えてくれた「かっこよさ」は、今の僕の進路につながった。将来は、障害のある人が同じ社会で生きていくための力になる。そのために、福祉を学びたい。天才科学者、メジャーリーガー、スーパーモデル。どれにもなれなくていい。相手の痛みを想像できる、相手を心から大切にできる人。本当にかっこいい自分に、僕はなりたい。

【優良賞】

# こんなときこそ



青森市立西中学校　２年　大水　太朗

こんなときに限って。僕は、野球の決勝戦の前に、腕を痛めてしまったのだ。

僕は、野球部の主将をしている。新チームになって初めての大会で、僕たちは決勝戦まで勝ち進んだ。決勝戦の二日前、先生から「決勝戦で投げる」ということを伝えられ、気持ちが高ぶった。その日の練習の時、腕が少し張っていたが、「いつものことだから大丈夫だ」と勝手に自分で決めつけ、いつものように練習をしていた。次の日になれば治っているだろうと思い、その日は湿布を貼って眠った。

次の日、練習試合に先発で出場することになっていた。試合前にブルペンで投げていたときに、少しだけだった痛みが強くなり、はっきりとした痛みになっていた。先生に話して、明日の決勝に出るのをやめようかとも考えたが、やはり試合に出たいという思いが強かった。悩みながらも、誰にも言えず、調子も上がらないまま試合に入った。そのときの感情は複雑で、なぜか孤独感を感じた。

その回はなんとか0点に抑えることができた。しかし、痛みに耐えきれず、先生に正直に「痛い」ということを話した。後続のピッチャーたちにもチームにも先生にも迷惑をかけてしまい、申し訳なく思った。異変を感じたとき、すぐに誰かに相談すれば良かったと、僕は思った。

次の回から、キャッチャーとして試合に出たが、いつものようなプレーができず悔しい結果に終わってしまった。試合後のミーティングで、明日の決勝に出ることはできないと言われ、ショックだった。家に帰ってから、あまり表情に出したくないと思っていたけれどやはり泣いてしまった。その時に、もっと体のことを考えて行動すればよかったと僕は思った。

決勝戦当日がやってきた。決勝戦の相手は市内の強豪校だ。結果は、ヒットを一本も打てず、五対〇で負けてしまった。試合が終わった後、チームメイトから「お前がいなければだめだ」と声をかけてもらい、嬉しい反面、プレッシャーのようなものを感じた。しかし、そのときは早く野球がしたいという思いが一番強かった。

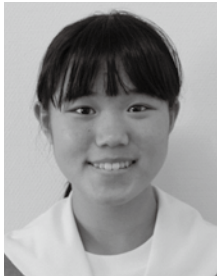
僕は、小学生の頃にも同じような経験をしている。小学校の頃は、怪我をすると練習に積極的に参加できず、野球を楽しむことができなかった。しかし、中学校に入ってからは、クラブチームの頃のチームメイトと小学校からのチームメイトと早く野球がしたいと思うことが多くなり、今では、怪我をしても野球を第一に考えることができるようになった。これは、小学校から中学校に上がって、大きく成長できたことだと感じている。

僕たちは今、全国大会出場という目標に向け、日々練習を頑張っている。僕は怪我をしているため、主将なのにチームに迷惑をかけている立場だ。焦らず早く治して、治ったら、次の大会で今まで以上に大暴れしてしっかりとチームに貢献したい。全国への切符をつかむため、ストレッチなどの体のケアを行い、早く完治できるように頑張っている。

僕は、今回のことから、前向きに考えることの大切さを学んだ。怪我をしてネガティブに考えていたとき、チームメイトから「お前がいなければだめだ」と声を掛けてもらい、もっと前向きに考えなくちゃいけないと思うことができた。ネガティブな考えを捨て、前向きに考え、早く楽しい野球ができるよう今を頑張る。練習ではランニングなどのトレーニングに積極的に取り組んで、肩が治ったあと、今まで以上に大暴れできるよう努力を怠らない。「こんなときに限って」ではなく、「こんなときだからこそ」と前向きに考える強さを学んだ。

【優良賞】

# 生きている幸せ



**階上町立道仏中学校　1年　東野　愛**

平成二十三年。三月十一日。十四時四十六分。これまでになかった悲劇が私たちに襲いかかりました。

当時の私は五歳。「地震」という言葉も「災害」という言葉も知らない頃でした。ぐら、と来たときは、保育園でお昼寝をしている時でした。長い揺れが続き、起こされた私たちはすぐにリュックを背負わされました。「いつもと違う……」。私はその時初めて思いました。

普段よりも早く祖父が迎えにきて私は家に帰りました。ストーブもテレビもつけていません。夜はラジオを聞きながらベットに入りました。ラジオの奥から聞こえる声は、家族をより不安にさせているように感じました。そのような日が何日も続き、保育園にも行かなかったため私は母に、

「何で保育園に行っちゃだめなの。」と、勇気を出して聞きました。すると母は、

「大変なことが起きたからだよ。」と、悲しい顔をしながら答えました。まだ幼い私でしたが、なぜかその時のことは今でもはっきりと覚えています。

あれから八年が経ち、私はあの3．11に起きたことがようやく理解できる年ごろになりました。特集の報道番組が伝える映像はまさに信じられない光景でした。たくさんの家が建ち並び、たくさんの人でにぎわっていた町は、変わり果てていました。人々のくらしを支えていた海は、その姿を津波と変え、地響きとともに、次々と町をのみ込みました。震災前と震災後の写真はかけ離れていました。

「震災が人生の全てを変えてしまった」。取材を受けていた、今でも一人で町に住むその方のお話が鋭く胸にささりました。

私の住む地域でも、津波があり被害に遭われた方々がいましたが、あの時あの不安な夜のラジオは、大変なことが起こってしまったことを刻々と伝えていたのです。後に「東日本大震災」と呼ばれることとなった大災害。太平洋側の多くの地域は、たくさんの犠牲者が出る甚大な被害に見舞われたのです。幼い日の母の悲しい顔が私の頭をよぎりました。

時が過ぎ復興が進んだ町もありますが、まだ実質的な避難生活は続いていて、震災が人々の人生に残した爪あとは、まだ残されたままなのです。私はいまだに行方不明の方がいるという現状を知り、とても重く、苦しい気持ちになりました。

たくさんの犠牲者の「まだ生きたかった」という無念な気持ちはいかばかりだったことでしょう。そして、大切な家族を失った、残された家族の方々が抱えてきた悲しみは、恐ろしくて、想像することすらできない私がここにいます。

「生きるって何だろう?命って何だろう?」。ある道徳の時間に、クラスのみんなで考えました。「喜び」、「悲しみ」、「好きなことができる」など、さまざまな答えが出てきました。生きているから喜びと悲しみが感じられる。生きているから何でもできる。生きているから夢がある。そう考えると、生きるって簡単そうに見えて実は大変なことなのかもしれないと思いました。

今の私は、中学一年生の時間を一生懸命生きています。勉強やバスケはやりがいがあり楽しいですが、自分なりの悩みもあって、とまどってしまうことがよくあります。一つの試練を乗り越えたらまた次の試練と、その繰り返しです。それでついついぐちをこぼしてしまいますが、この繰り返しこそが私の「生きる」だと思ってがんばっています。

これからも私は、自分の取りまく多くの人や支えてくれる家族を大切にしながら、悔いのないよう全力で生きていきたいと思います。それが私の「生きている幸せ」だと信じているから……。

【優良賞】

# 人を変える勇気

青森市立南中学校　３年　日野　木乃葉

全国的にいじめが原因で自殺する中学生が跡を絶ちません。なぜこのような負の連鎖が起こるのでしょうか。人は一人では生きていけません。だからこそ人間関係は私たちが生きていく上で最も大切にしなければいけないものです。私たち中学生はこの人間関係に敏感です。その中で仲間はずれにされたりしたら言いようのない不安感を感じ、孤独に押しつぶされてしまいます。SNSなどで中傷されたり、直接大きな声で罵倒されたりしたらあまりにつらくて、死にたくなるでしょう。どうしていじめは起こるのでしょうか。どう人とつきあえばいじめを防げるのでしょうか。

私は最近ある友人の一言で、いじめについて考えさせられました。それは、桜祭りが近づいてきた四月のことです。私は何人かの友達と桜祭りに行こうという話をしていました。そこへ現れた一人の友達が、突然自分も行きたいと言い出しました。私たちは顔を見合わせて黙り込んでしまいました。それは私たちが苦手としている人だったからです。その時は桜祭りに行くための具体的な話がでなかったので話は立ち消えになりました。

後日、仲間からこんな提案がありました。「あの人とは桜祭りに行きたくないから、あの人の前では桜祭りのことは言わないようにしようよ。」私はこの提案を直ぐに受け入れ否定しませんでした。なぜなら私自身が彼女を嫌っていたからです。その時でした。その雰囲気を断ち切るようにA子さんが突然こう言ったのです。

「彼女を省くことないでしょ。三年年になったんだから、仲良くしようよ。部活の仲間なんだし、省くとかやめなよ。」

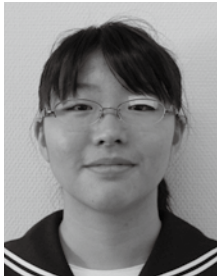
この言葉を聞いたとたん、私たちは胸が痛みました。そしてこの時、自分たちがいかに卑劣であるかを思い知らされました。A子さんの一言で、私たちは「省く」という行為がどんなに悪質で人を傷つけているのかを考えさせられました。もしもあのときA子さんのあの言葉がなければ、私たちはどうなったでしょう。彼女を省き、秘密で桜祭りに行くことで結束が強まり、ますます彼女を排除していくことになっていったと思います。それはいじめに他なりません。いじめは悪いことだと誰でも知っています。私たちだって彼女をいじめようとした訳ではありません。でもいじめの被害がいっこうになくならないのは、私たちのように、もしかしたら自分が何気なく言った言葉や行動にいじめているという自覚がないからなのではないでしょうか。被害者ばかりが傷みを感じるのです。

人は自分と波長が合わなかったり考えが違うと、嫌だと決めつけ、その人の全てが全部マイナスにしか見えなくなります。そして仲の良い人だけで仲良くし、他を寄せ付けず排除しようとします。桜祭りの一件は、その始まりだったと思います。その負の連鎖を断ち切ったA子さんを友として誇りに思います。私はいつも他人に流され、人間関係を悪くしないように、嫌われないようにと常に相手に同調してしまいます。はっきり言う勇気がありません。そんな自分が嫌いでした。どんな人にも欠点が有り、それと同じくらい良いところもあるはずです。それを探そうともせず省いて関わりを持たないようにするのはいじめを助長するだけです。A子さんは私の憧れです。A子さんが私を変えてくれました。

相手の良さを見つけ、どんなときも人を傷つけるような行為はしない。そしてどんなに仲が良くても相手の意見に惑わされず、間違っていることは迷わず指摘し合う－そんな友人関係を目指していけば、きっといじめの連鎖は絶てると思います。私は自分を変えていこうと心に決めました。青い空のように爽やかに、人と向き合う勇気を持ち続ける－それが日本中に広がっていくことを願っています。

## 【優良賞】

# 命



弘前市立船沢中学校　３年　小山　愛依

皆さんに兄弟はいますか。私には弟が一人います。本当は姉が一人、兄が一人、弟がもう一人います。でも存在していません。

私がこの事実を知ったのは最近です。リビングにある私専用の棚を片付けている時でした。一冊の厚いファイルを見つけたのです。

それは私が、三、四年生の頃に書いた作文、図工で作った作品や日記がはさんでありました。なつかしいなと見ていると、茶色の封筒を見つけたのです。何だろうと思い、封筒の中を見ると手紙が一通入っていました。

小学校の授業で使うということで母が書いてくれたものでした。手紙の内容は、私が生まれてとてもうれしかったということ、私と弟には、姉、兄、弟がもう一人いたということが母のきれいな字で書かれていました。私は母が流産をしていたことに衝撃を受けました。小学校の時も読んでいたとは思うのですが、よくわかっていなかったのです。手紙を読んでいる途中に母が来て「何してるの。」と聞かれ、おもわず手紙を隠してしまいました。とっさに「片付けているんだよ。」と自分でもわかるぐらい下手な作り笑いで言ってしまいました。母に辛い記憶を思い出させたくないと思ったからです。

その手紙を寝る前に自分の部屋で何度も読み返しました。読んで行く程、誰かに心臓を手で強く握りつぶされそうになるぐらい、辛く、悲しい気持ちになりました。もし、三人が存在していたのなら、父にそっくりだったかもしれない、母にそっくりだったかもしれない、頭が良かったのかもしれない、私が苦手な数学を教えてもらっていたのかもしれない、私が愛してやまないワンオクについて語り合えていたかもしれない、兄弟でテレビゲームを楽しんでいたかもしれないと、想像が止まらなくなりました。

ふと思いました。私が生まれて来て良かったのかと。三人は生きることが出来なかったのに私は生きていて良いのか、健康に生まれてきた私のことを、三人はうらんでいるのではないかと、自分を責め込む気持ちが生まれたのです。正直、今でもそう思うことがあります。

でも、そんなことを思って生きていたら、少しも前に進めません。私は手紙を読むまで人間が生まれるということが奇跡ということを実感出来ませんでした。人間が生まれることはあたり前だと思っていました。それは間違いでした。手紙を読んでようやくわかったのです。

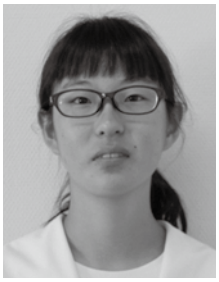
生まれることは簡単なことではないということを皆さんにも理解してほしいのです。もしかしたら、自分ではない誰かが生まれて来たのかもしれないのです。もし、三人が生まれていたら、私は生まれていなかったのかもしれません。父と母が出会っていなかったら、姉、兄、私、二人の弟すら存在していません。この与えられた人生、命をむだにせず、大切にしていきます。人生にむだなことなんてありません。どうか皆さん、簡単に「死にたい」などの言葉を言わないでください。自殺をしようなんて思わないでください。兄弟がいなくなれば良い、一人っ子が良かったなんて思わないでください。

私も以前はそうでした。でも、たった一人の弟です。私にとってじまんの弟です。私に弟が出来たという奇跡をうれしく思います。

命というものは、そこにあるだけで輝いていけるものだと私は思っています。今でも子供を健康に産むことが出来ず、悲しんでいる人々が沢山います。そんな人々に優しく手を差しのべて支えていけたらと思います。私は、三人分の人生を合わせて前向きに生きています。

【優良賞】

# 自由とは



階上町立道仏中学校　３年　幸田　萌愛

「自由とは一体何だろう。」
そう思い始めたのは、中学二年生の冬でした。

私には塾に通っている友達がいます。ある日の夜、私はその友達に塾のクリスマス会に誘われて一緒に行くことになりました。

塾のクリスマス会では、高校についてなど色々な学びがありました。その中でも、一番心に残っているのが、「自由」についての話でした。考えるきっかけになったのは、塾の先生の言葉。
「自分のやりたいことを好き放題やるのは、自分に縛られていて、自由とは言わない。」と、その先生はおっしゃいました。世界中の自由というのは、好き放題やることだと思っていたので、本当に驚きました。だから、「自由」とは一体何なのかをつきとめてみたくなったのです。

「他人に縛られないで、自分のやりたいこともやらないのが自由なのか?」。頭の上には大きなクエスチョンマークです。そこで私は携帯を使って調べてみました。

本来「自由」というのは仏教用語で、「自らを由とする」と読むそうです。自分で決めて行動したのだから、何か事態が起きたとしても、全ては自分を理由にしなければならず、責任が伴うと記してありました。

自分のやりたい放題勝手にやったとしても、必ず責任をもって行動することが自由なのか。世の中の多くの人々は、自由という言葉を声高に連呼しますが、実際にはそのものの全てに責任をしっかり持って行動しているとは思えないことが多々あります。自分勝手に行動しても、何か事態を引き起こした時、ほとんどの人は、誰かかれかの手を借りて、責任をとっていると思います。責任や義務をどこかにやってしまった日本人にありがちな「自由」もどきは、やはり真の「自由」とは呼べないと考えさせられました。

その点欧米では「自由」を追求してきた歴史は長く、子どもの躾方から、「自由」を、人が生きることの根本として教え込んでいるということがあるようです。日本では、子どもはまるっきりこども扱いで、責任をもたせるようなことはあまりさせません。一方欧米では、乳幼児でも、一人の独立した部屋に寝かせ、独立心を養うそうです。たとえ子どもであっても、やりたいと言うことには、あまり制限をつけずにやらせるそうです。でも、制限をたくさんつけて、大人がやたらと子どものやることに口を出したがる日本と、子どもであろうが容赦なく責任の重さを教えていく欧米とではそもそも考え方が違いすぎると私は思いました。

「自由」という言葉の響きからは、確かに頭や心の中が解放され、楽になるイメージが私にはあります。でも、見通しを立てて挑む「自由」でなければ、結局は自分自身が痛い思いをしたり、手を借りている誰かに迷惑をかけることになるのです。だからこそ、私たちは、「自由」になれるのは周囲のおかげということを忘れず、常に「感謝」の心をもつことが大切なのだと感じました。

大人になるについて、子どもと呼ばれる人の自由は少しずつ広がっていきます。私たちは、中学生時代から社会に出るために大切なことを学び、実際にやり遂げることで、やっては駄目なことを知り、自分で背負える限界をわきまえることが必要だという結論に辿りつきました。周りに迷惑をかけることなく人生を楽しむこと。私の「自由探求」はこれからもまだまだ続きます。

## 【講 評】

原稿審査を経て本日の大会に臨んだ８名の皆さん、様々なテーマでの発表、大変御苦労様でした。

最優秀賞の山本さん、優秀賞の佐藤さん、相内さん、優良賞の大水さん、東野さん、日野さん、小山さん、幸田さん、受賞本当におめでとうございます。

人間関係や共生社会、生命の尊さ、家族愛、生き方等について、一人ひとりが自ら体験したことをもとに、思ったこと、感じたこと、そして時に悩み考え抜いたことを素直に表現し、中学生らしい視点での新鮮な意見発表でした。また、聴いている人に共感と感銘を与える内容でもありました。

審査は、論旨、内容、論調、表現力の観点について行いました。8名とも各観点の得点が高く、甲乙つけがたい素晴らしい評価結果でした。

皆さんの良かった点を、たくさんある中から3つに整理してお話しします。

一つ目は、文章構成がしっかりしていて、論旨が明確だったこと

二つ目は、落ち着いた態度で語り掛けるように話し、熱意があったこと

三つ目は、感性豊かな意見で、実践意欲があったことです。

それぞれの発表内容は、テーマが明確で、段落構成を考えて作文し、推敲したと感じられるものでした。また、話すときには、声の大きさ、話すスピード、抑揚、間のとり方を考え、感情を込めて思いが伝わるように工夫していました。そして、一個人の意見にとどまらず、生活や社会をより良いものにしようとする意欲が感じられました。

私たちは、豊かな自然に囲まれ、たくさんの人たちと互いに助け合い、支え合って生活しています。自然との関わりは「感性」を、人との関わりは「感情」を豊かにすると言われます。皆さんがこれから更に感性と感情を豊かにし、心身共に健康で、変化の激しい社会の中でもたくましく生き抜く人になることを期待しています。

本日会場にお越しの保護者並びに地域の皆様方、発表者へあたたかい拍手をいただき、誠にありがとうございます。今後もこれまで同様、次代を担う青少年の健全育成に御尽力くださいますようお願いいたします。

真剣な眼差しで意見発表に耳を傾けていた浦町中学校の皆さんは、聴く態度がとても立派で、審査員や大会関係者からたくさんのお褒めの言葉がありました。同世代の生徒が日常生活の中でどのようなことを思い、どのようなことを考えているのかを知る大変よい機会になったことと思います。共感できたことを皆さんのこれからの生活に活かし、広い視野に立って物事を考え、実行する人になってほしいと思います。

最後に、発表者の皆さん、発表者への指導並びに大会運営等に御支援・御協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げまして、審査員を代表しての講評といたします。

**青少年育成青森県民会議**
**青少年専門指導員　三上　真広**

## 第41回「青森県少年の主張大会」実施要綱

1　趣　　旨　　中学生が日常生活の中で感じていることや考えていることを発表することにより、次代を担う青少年としての自覚と自主性を育てるとともに、同世代の意識の啓発及び青少年の健全育成に関わる大人の青少年に対する理解と関心を深めることを願い実施する。

2　開催日時　　令和元年９月１０日（火）　１３：３０～１５：３０

3　主　　催　　青少年育成青森県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構

4　後　　援　　青森県　青森県教育委員会　青森市教育委員会　青森県中学校長会
青森県私立中学高等学校長協会　青森県ＰＴＡ連合会

5　開催場所　　県民福祉プラザ

6　実施方法　　所定の課題についての主張を県内の中学生から募集し、原稿審査で選考された８名による主張発表を行う。

7　内　　容　　（１）開会
（２）主張発表
（３）審査
（４）結果発表及び表彰
（５）閉会

8　表　　彰　　主張発表を行った８名の中から最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考し、賞状と記念品を贈る。

9　そ の 他　　最優秀賞を受賞した者は「少年の主張全国大会」( 以下「全国大会」という。出場候補者として推薦され、審査委員会による審査の結果、北海道・東北ブロック代表（２名）として選考された場合は、全国大会に出場する。

# 講　演

## 「輝く君のために」

シンガーソングライター
桜田　マコト氏

皆さん、こんにちは。
ご覧いただいた映像は、昨年の夏にニューヨーク・カーネギーホールでコンサートをさせて頂いた内容をもとに作ったアピールビデオです。
今日は、少年の主張大会に呼んでいただき本当にありがとうございます。桜田マコトです、よろしくお願いします！

ニューヨークには、ミュージシャンになりたい、ブロードウェイのスターになりたい、さまざまな夢を叶えたい人が世界中から沢山集まっています。

僕も、その一人でした。僕が音楽に目覚めたのが中学校の頃、１４歳でした。思春期、多感な時期とよく言われますけど、これからどうしていこうか、何かやっていかなきゃと考える、いろんな迷いがある時期だったと今でも覚えています。
今日は、８人の生徒さんたちが自分自身の幼少の頃の思いやつらかった思いをいっぱい言ってくれてました。恥ずかしいことがあったかもしれない。辛いこともあったかもしれない。でも、みんなそれぞれがいろんなことを乗り越えてきたことを、自信をもって言葉にしていたというふうに思いました。

実は、僕、３歳のとき髪の毛が全部抜けてしまう難病に罹り、両親や家族もこの先どうしたらいいのだろうと心配したらしいです。ただ、僕自身が小さい頃から音楽が好きだったり明るい性格が功を奏して、乗り越えていたんですけれど。でも、いつも明るく振舞えていたわけではなく、誰とも話せない、すごい人間不信になった時期もたくさんありました。小学校５～６年の頃、周りから「あいつ病気だよ」って皆に指さされたり、嘲笑されたり。自我の目覚めとともに、葛藤、不安、これからどうやって生きていこうかなって。そして中学校という新しい社会に入って、将来のことを考えないといけないすごい辛い時期でしたね。いつも、何が自分にとって一番大切なことかなって考えてました。
そんな時、うちにあった埃をかぶったピアノの蓋を開けて鳴らし始めたらその音でとても心が癒されて。この時間がずっと永遠に続いたらいいなあって思っていたそんな十代の最初の頃を今でも思い出します。

そんなことをいろいろ思い出しながら皆さんの発表を後ろの席で聞かせていただきました。僕も中学生の頃の気持ちが今でもずーっと続いてて、世界で歌っていきたいって想いになったのもやっぱり中学校の頃だった。病気で人前に出るのも嫌で人間不信だったそんな僕にも、その想いを慰めてくれて一緒に語ってくれた友達がいます。僕の部屋に集まって好きな音楽や映画の話なんかを一緒にしてくれた。この中学生の時期、友達との関係の中で自分自身が作られていったなぁと感じています。
その頃、家で一人ピアノを弾いていた僕に、友達が「一緒にバンドやらない?」「文化祭で演奏しよう」と声をかけてくれたのが、今でも僕のスタート、原点だったと思っています。
「次の文化祭でバンドステージはやらせない」っていうのを、バンドメンバーと一緒に職員室に行き、「次の期末テスト頑張るので何とかバンドやらせてください」ってお願いをしに行ったこと、すごい鮮明に覚えています。その時期に傾倒していた「オフコース」の音楽を、友達と一緒に自分の思い、叫びを歌声

にのせてやったのが中学三年生。髪の毛が全部抜けて、人前に出るのも嫌で、もう本当に死のうかなと思ったこともあったけど、それを救ってくれた音楽とその音楽を教えてくれた友達がいて、そして初めて中学校の舞台に立って歌が終わった後の会場の拍手に「うわーっ、生きてて良かったー！」そう思った14歳の時の感動が今でも僕の原動力になっています。

今日は中学生の皆さんが会場にいらっしゃるというのでこの話をしたんですが、是非皆さんに覚えていって欲しいなと思うのは、いろいろ辛いこと、例えば自分の成長過程においての葛藤やうまくいかないことってあると思うんですが、それって、全部神様からもらったプレゼントなんです。「今、これを乗り越えなさい、あなたの将来に必要ですよ」ってね。きっとどこかで言ってくれているんですよ。自分の病気に関してもそうだったし。そんな時は是非「ラッキー！」って思ってください。「よし、これをバネにがんばるぞ」と。辛いな、ピンチだなと思ったら「チャンス！」と思ってください。「これもひとつ、バネにしてがんばるぞ」。そうやってこつこつ歩んでいく中で、自分が思い描いていた夢、そして将来の自分像、そういったものが形になっていくんじゃないかと思います。

僕自身、今年デビュー25周年なんですが、僕が出会い元気や勇気をもらった音楽を続けて来られたのは、周りの家族や友人、先生、いろんな方々がサポートし支えてくれたからだとすごく実感しています。

今日のテーマにした「輝く君のために」は、自分の夢を叶えるため大勢のみんなと手を組んで前向きに歩んで行こう、そんなことをテーマに作詞作曲した曲で福岡ソフトバンクホークスというプロ野球チームの応援歌にもなっています。僕のこの曲を今日お集まりのみんなのための応援歌としてお届けしたいと思います！「輝く君のために」、いってみよう！

大きな夢を叶えるために　全力で走り続けていこう
共に流した汗と涙は　夜空の星のようにきらめくよ
この星たちがいまこうして輝いているのは
ボクらの未来を照らすためのヒカリなんだ
あきらめずがんばれば　輝く明日が待っている

さぁ一緒に
フレー!フレー!羽ばたいて　ほら
フレー!フレー!チカラの限り
フレー!フレー!輝く星をこの手でつかもう

希望の旗を掲げた船を　大海原に漕ぎ出していこう
心ひとつにチカラ合わせて　夢を叶える旅に出発だ
たとえ激しい嵐が来ても今を信じて
ボクらの想いは強く強く明日に向かうんだ
あきらめずがんばれば、輝く未来はそこにある

さぁ一緒に
フレー!フレー!羽ばたいて　ほら
フレー!フレー!チカラの限り
フレー!フレー!いちばん輝く星をつかもう
ボクらの想いをひとつひとつ積み重ねれば
何だって乗り越えられる強さになる
あきらめずがんばれば　輝く明日が待っている

さぁ一緒に
フレー!フレー!羽ばたいて　ほら
フレー!フレー!チカラの限り
フレー!フレー!輝く星をこの手でつかもう

さぁ一緒に
フレー!フレー!羽ばたいて　ほら
フレー!フレー!チカラの限り
フレー!フレー!いちばん輝く星をつかもう
輝く君のために

# 第41回　少年の主張全国大会 ～わたしの主張2019～
## 内閣総理大臣賞

# 心の扉

東京都　筑波大学附属視覚特別支援学校（中学部）　１年　藤田　大悟

「視覚障害はただ目が悪いだけで、努力すれば健常者と同じように勉強できる。」
普通小で日々を過ごす中、こんなことを思っていました。今思えばその気持ちの後ろには「みんなに遅れを取らないように頑張らなきゃ。」という一心で自分を追い詰め、クラスから自分を守ろうとする見えない鎧を身につけていたのだと思います。
六年生の春。鎌倉への遠足での出来事です。鎌倉は山道も多いことから当初は行くことに乗り気ではなかったのですが、思い出作りと思って行くことにしました。
「班全員で最終チェックポイントを回り終わること。終わった班からお弁当。」というルールで遠足がスタート。全員がチェックポイントめがけ走り出し、班のみんなもどんどん進み、僕との距離は離れていきました。
「僕が視覚障害ってこと、知ってるよね。少し待ってよ。」
と思いましたが、次第にみんなの姿も鎌倉の山道の中に消えていきました。
やっと合流した最終チェックポイントで、
「お前のせいで回るのが遅くなったじゃないか。」
と言われ、愕然としました。
「ごめん。」
この言葉で精一杯でした。遠足終了。
僕は遠足の後、
「みんなの気持ちもわかるけど、あんなことを言われて解決しないまま卒業したくない。」
とじっくり解決の道を探っていました。ふと、
「僕の見え方、配慮して欲しいことを皆に説明したことあったかな?」
と考えた末に「自分」をスピーチで伝えることにしました。
十一月七日、ついにその日が来ました。まず器具を使って僕の見え方を体験してもらうと、
「大悟ってこんなに見えてなかったんだ。」
という第一声が飛び交いました。見え方さえ分かり合えていないことを知り、今まで説明していなかった自分が情けない反面、話せて良かった、という安心感が複雑に混じりました。次に配慮して欲しいことなどを伝えてスピーチが終了。
この日は僕にとって貴重な一日となりました。なぜなら、予想以上にわかり合えていなかったことを知り衝撃的だった一方で、現状を伝える大切さを痛感したからです。
そして、スピーチから一ヶ月経った十二月八日、音楽会を迎えました。僕は学年代表としてピアノ伴奏をすることとなり、日々練習に励みました。
本番当日、保護者を前に異様な緊張に包まれた体育館で演奏が始まりました。不覚にも数小節の音が抜けてしまいました。が、日々練習を重ねたことで幸運にも伴奏を再開できました。しかし伴奏終了後は、あれだけ練習したのにという、やりきれない思い、合唱を台無しにしたという罪悪感、鎌倉の時のように皆から責められ孤独を味わうのではないかという恐怖、様々な思いが一気に押し寄せます。今までにないほどの涙が溢れました。
恐る恐る教室へ帰るとなんと予想に反してみんなが励ましの声をかけてくれたのです。この時僕は辞書を引いても適する言葉が見つからないほど幸せな気持ちでした。スピーチで皆が本当の僕をわかってくれ、一人のクラスメイトとして受け入れてくれた、と肌で感じられたからです。同時に、皆に対して構えていた僕の中にあった見えない壁も崩れていきました。この瞬間、気持ちが初めて通じ合い、障害という枠を超え認め合っている仲間の証拠を感じられました。
この体験で新たなことに気づきました。
それは、「自分が障害者だから自分を理解してもらおう」と相手にばかり求めるのではなく、自分も心を開いて相手を受け入れる必要があるということです。このことは当然のことのようですが、その一歩を踏み出すのはとても勇気のいることでした。だからこそこのような体験ができてとても嬉しいです。この体験を心のノートに太文字で書き記しておきたい。
「心の扉を開こう。そして、Let`s チャレンジ。」

## 文部科学大臣賞

# 私が望む優しい未来は

熊本県　熊本大学教育学部附属中学校　3年　廣岡　里奈

「周りを見るとスマホをさわっている人ばかり。」

電車で通学する際、いつも広がっているこの風景。人間がスマホを操る側のはずが、皆、スマホに操られている。

SNSが発達している今。私達は、会いに行かなくても簡単に連絡がとれる。スマホの中でなら、本当の自分の感情を知られることなく、コミュニケーションもとれる。

しかし、この便利さと引き換えに、失われたものがあることに気付いている人はどのくらいいるのでしょうか。

忘れもしない二年前の冬の日。急に病院に運ばれた祖父が他界しました。祖父は、祖母と二人暮らし。隣に住んでいて、私達をいつも見守ってくれた存在。この別れは、人生で初めて経験する深い深い悲しみでした。

祖母とは、短い会話やスマホ越しのやり取りばかり。その中での祖母はいつも通りで私は安心していました。

祖父の死から二週間経った日。学校も塾も、部活も休み。やっと、祖母の顔を見て、話ができる。夕方になり、少しだけ元気を取り戻した祖母と、肉じゃがを作ることにしました。その時です。祖母がポツンとつぶやいた言葉。

「今日は、料理を作る相手がおって嬉しかあ。ばってん、どがんして作るだったかなあ。」

料理の仕方を一時的に忘れていた祖母。どれだけの衝撃に襲われたのだろう。どれだけ寂しかったのだろう。こんなに近くに住んでいたのに…。悔しさがこみ上げてきた。

いつの間にか私も、スマホの便利さに頼りきっていた。祖母の本当の気持ちを感じ取ることができなかった。もし、できるだけ顔を見て、生の声を聞いて、祖母と過ごしていたら、もっと早く気付けたはず。

それからの私がしたことは、できるだけ直接会話をすること。

「ただいま!今日のテストはえらい難しかったけん、解けんかったー。」

「よかよか。次頑張らなんたい。ばあちゃんが中学生の時はねえ…。」

学校での出来事、友達のこと。祖母は自分が若い頃の話も交えながら、喜んで聞いてくれます。今では、祖母との会話がとても楽しみです。

現代の私達は、情報技術のめざましい発展により、たくさんの恩恵を受けています。スマホはとても便利です。しかし一方で、私達は、その便利さに依存しすぎている部分があるのではないでしょうか。人と人とのコミュニケーションが希薄になり、寂しい人生にしてしまっているのではないでしょうか。

今回のことを通じて顔を見て話すことがどれほど大切なことか、祖母に教えてもらいました。世界の中にはまだ、気付いてほしいのに気付いてもらえない人、本当に伝え合うことを求めている人がいます。

二年が経ち、祖母の笑顔は段々と戻り、肉じゃがを作ってくれるようになりました。私はそれがとても嬉しいです。

表情を見て話す。電話をする。それは、スマホでのやり取りより時間がかかります。限られた時間を、どれだけ相手のために使えるか。そこには、思いやりの心や愛があります。

心に何かが引っ掛かるとき、私は会いに行く。会えないときには電話をする。

私は強く望みます。人と人とが想い合う優しい未来を。

## 国立青少年教育振興機構理事長賞

# 繋ぐ糸が切れないように

山梨県　北杜市立甲陵中学校　2年　小松　日菜

「どちら様?」私は、祖父にこう聞かれました。私の大好きな祖父は、私を忘れてしまったのです。

両親が共働きの私は、物心ついた時から、朝起きるとすぐ祖父母の家に行き、夜、両親のどちらかが帰ってくるまで過ごす、という生活を送っていました。だから、一人っ子で遊ぶ相手もいなかった私の相手をしてくれたのは、いつも祖父と祖母でした。

祖母はとても元気な人で、毎日せっせと畑仕事をし、私が学校に行っている間の事をたくさん話してくれました。祖父は寡黙でしたが、本当は優しい人で、「早くママとパパに会いたい」と泣いていた小さな私を、一生懸命なだめてくれました。私は祖父母が大好きでした。二人のお陰で、私の寂しい気持ちは和らいでいました。

しかし、その優しかった祖父が認知症と診断されたのです。私は、小さくなっていく祖父を、いろいろな事を忘れていく祖父を見ている事ができず、祖父母の家に行くのを躊躇うようになりました。

診断からしばらく経ったある日の事、久しぶりに祖父母の家に行くと、「どちら様?どこから来たの?」と祖父が私に言ったのです。

覚悟はしていました。いずれ私のことも忘れてしまうのではないかと思っていました。でも、あんなにたくさんの時間を過ごしてきたのに。あんなにたくさん遊んでくれたのに。積み重ねた物が、音をたてて崩れていくようで、繋いでいた糸がプツッと切れたようで、悲しくて、悔しくて溜まりませんでした。

それからしばらくしてのことです。

私の通う学校で「高齢者の言動を科学的に理解しよう」というテーマで、講演会がありました。そこで、「記憶というのは壺のような物で、若い時は壺の入り口が狭く、記憶は壺からこぼれにくい。しかし老化が進んだり、認知症になったりすると、壺の入り口が開き、新しい記憶からこぼれ落ちる。だから、認知症になっても昔の記憶は残っているといわれている。認知症の方が昔の話ばかりするのは、そんな脳のメカニズムから来ている。」というお話をして下さいました。

その話を聞き、祖父の中に、私との思い出が残っている可能性があるという事が分かり、心の中の消えてしまった一つの火が、ポッと灯ったような気がしました。それ以来私は少しずつ祖父に会いに行き、静かに隣にいるようになりました。祖父は昔と変わらない優しい笑顔を向けてくれます。その度に、祖父と私を繋いでいる糸が切れていない事を感じます。

日本の認知症患者数は、二千二十五年には七百万人にも上ると言われています。もしかすると、あなたの大切な人があなたの事を忘れてしまう日が来るかもしれません。大好きな人が自分を忘れてしまうのは、悲しくて、悔しくて、とても怖い事です。でももしその日が来たら、とても勇気のいる事ですが、ただ寄り添ってください。自分が誰なのかを説明する必要はありません。なぜならその人の心の奥に、ちゃんとあなたは生きているからです。そこで、あなたと大切な人がしっかりと繋がっている事に気づくはずです。

そして一番大事なのは、大切な人の笑顔が見える内に、素敵な思い出をたくさん作る事です。それが、あなたと大切な人とを繋ぐ糸となります。

おじいちゃん、また遊びに行くから待っていてね。

## 審査委員会委員長賞

# 十人十色

宮城県　登米市立佐沼中学校　3年　加藤　海音

「皆さんの目に、僕はどのように映るでしょうか?」

僕は、発達障害を抱えています。そのため小学校から中学校一年生までの七年間、特別支援学級に所属していました。発達障害とは主に先天性の脳機能障害が原因となって生じる発達の遅れです。どうしてそうなるのか、詳しいことはまだ解明されていません。発達障害にはいくつかの種類があって、僕の場合は人の気持ちや感情を読み取ることが苦手で、対人関係をうまく築けないことがあったり、特定のものに興味やこだわりをもってしまうため、協調性に欠けることがあったりします。この障害の厄介なところは、パッと見ただけでは分かりにくく、周りに理解されないという点にあります。そのため、障害そのものよりも周りに理解されないことに苦しむことがたくさんあるのです。

小学校の頃、僕が発言すると笑いが起きたり、「もう一回言ってみて。」と何回も同じことを言わされたりしました。最初は状況が読めず、言われるままに繰り返していましたが、バカにされていると気付き、発言するのが怖くなったことがありました。

また、みんなで話し合っているとき、自分の意見を除外されたり、意見が合わないと、「障害者だから」と一言で片付けられたりしました。頑張って伝えようとしているのに伝わらない。見えないバリアが張られているように感じ、悔しくて悲しい気持ちになりました。周りの理解が得られないもどかしさ、特別支援学級への偏見や差別的な言動は、僕を苦しめました。

ただ、誤解を招く原因が僕にあったのも事実で、だからこそ特別な支援を受ける必要があったのです。僕には担任の先生とは別に、補助の先生が付いてくれました。自分をうまく表現できないことがあると、気持ちを代わりに伝えてくれたり、トラブルに気付いて助けてくれたりしました。もちろん、僕が間違ったことをしたときには、その場でどこがいけなかったのかを教えてもらえたので、とてもありがたい存在でした。また、僕の家族にも感謝しています。みんなと違う僕を、無理に何か出来るように訓練したり、出来ないことを怒ったりせずに、やりたいことを自由にやらせてくれました。特別支援学級に所属することを嫌だと思ったことは何度もありますが、その支援を受けることができたから、今の僕があるのだと思います。

皆さんはご存知ですか?偉大な発明家トーマスエジソンが発達障害だったことを。Apple社を創設したスティーブ・ジョブズ、Windowsを開発したビル・ゲイツも発達障害だったといわれています。彼らは、周囲の人々と異なる特質を持ち、ある分野に強いこだわりと異常な興味を示しました。だから、いつも好奇の目で見られ、変人として扱われたそうです。しかし、その特質が新しい考えやアイディアを生み、パソコンやスマートフォンなど、今の僕たちの生活に欠かせない機器を生み出したのです。この話を知ったとき、僕は自分の障害はある意味、特別な個性なのではないかと思うようになりました。現在、日本の小中学生の約七パーセントが発達障害を持つというデータがあります。つまり、クラスに二、三人はいるという計算になります。僕がここに立って自分のことをさらけ出そうと思ったのは、僕と同じように苦しんでいる誰かの役に立ちたいと考えたからです。目に見えないからこそ、分かってもらえるように発信していかなければならないと思いました。

皆さんは、自分と異なる相手を勝手なイメージで固めてしまっていませんか。理由を付けてはじき出していませんか。十人いたら、十通りの個性があって当たり前です。相手をよく見て話しを聞いて上げて下さい。ありのままを受け入れて認めてほしい。障害を一つの個性と捉え、その個性が輝くような社会にできたら、どんなにいいだろう。僕はこれからも、自分の個性を堂々と語ることで、発達障害への理解を促していきたいと考えます。

## 審査委員会委員長賞

# 地域と共にある生徒会 ―今、私たちにできること、すべきこと―

**静岡県　静岡市立清水両河内中学校　3年　望月　香琳**

三十六人。これは、私が生徒会長を務める中学校の全校生徒の人数です。私は、生徒会長になるにあたって「地域と共にある生徒会」という目標を掲げました。三十六人という少人数で充実した生徒会活動を行っていく方法を模索していた私の頭に、すぐに浮かんだのは地域の人々の存在でした。小さい頃からいつも気にとめ、声を掛けてくれる近所の人たち、行事があるたびに参加し、活動を支えてくれる地域の人たちは、私たちの生活になくてはならない存在です。だからこそ、生徒会活動と切り離して考えることなどできないと思ったのです。そこで私は、生徒会活動を通じて、中学生にできる地域貢献がしたいと思い、この目標を立てました。

そして、その集大成として位置づけたのが「小学校と中学校の合同体育祭」でした。私たち両河内地域では、九月になると毎週のようにどこかの学校や地区で体育行事が行われています。地域に活気があふれ、一体感が生まれる、とても楽しみな行事なのですが、最近では、少子高齢化や共働き世帯の増加で、毎週末、ほぼ同じメンバーが出場したり応援したりすることが負担になりつつありました。そのため、もう少し地域の実情に合った開催方法はないかと、私たち中学生も思っていました。地域の体育祭と中学校の体育祭を同時開催してはどうだろうか、でも、広い両河内地域の人たちが一か所に集まるのは難しいだろうかと思案していた私たちの耳に入ってきたのが、「小中統合」という言葉でした。中学校だけでなく地域にある三つの小学校でも年々、児童数の減少が深刻で、数年後に三つの小学校と中学校を統合させてはどうかという話が進んでいたのです。私たちはこれを聞き、一緒になることが決まっているのなら、その先駆けとして今年は小学校との合同体育祭を企画してはどうかと考えました。数年先の統合に向けて、まずは体育祭という一つの行事を一緒に行うことで、地域に貢献できるのではないかと思ったのです。統合後の活気ある姿や九学年の子どもたちが、お互いに助け合い、楽しむ姿を示すことこそ、私たち中学生が今できる地域貢献、恩返しだと考えたのです。

この思いを先生方に相談し、小学校側の考えも聞いた上で出たのが、「両河内中学校と和田島小学校との合同体育祭」という案でした。いきなり三つの小学校を一緒にするのは難しいため、まずは今年、隣の小学校と合同で開催し、その成果や課題を把握しながら、徐々に合同の輪を広げていくことにしたのです。小学校の了承を得て、いざ具体的な内容を考えていこうと意気込んでいた矢先、中学生の中から合同体育祭反対の声が上がったのです。これは私にとって、驚くべきことであり、初めは全く理解できませんでした。しかし、話し合ってみると「中学校最後の体育祭は自分たちだけで盛り上がりたい」という素直な思いを訴える意見や「小学生と中学生は体力差があるため同じ競技をやるのは危険ではないか」というもっともな意見も聞かれました。たった三十六人ですが、思いや考えは様々であり、意見を押しつけただけでは上手くいかないことを思い知らされました。何度か話し合いを重ね、ようやく全校に自分たちの思いが伝わり、合同体育祭という歴史の一ページを築くスタートラインに立つことができました。

開催までの道のりも容易ではなく、具体的な競技内容や小学生との練習方法、さらには用具の準備といった細かなことまで、一つ一つ検討が必要で正直、不安ばかりでした。しかし、全員が同じ目標に向けて、意欲的に考え、積極的に行動する姿は私から見ても頼もしく、うれしくなるものでした。

そして去る九月、澄み渡る青空のもと行われた初の小中合同体育祭は大成功を収めました。この活動を通し、私たちは自らの成長を実感し、自信と誇りを持つことができました。私たちを温かく育んでくれた、ふるさと両河内の皆さんの前で、今、私たちにできる最高の姿を披露することができ、本当に良かったです。今後も地域と共にある生徒会のあり方を考え、後輩たちに引き継いでいきたいです。

# 第４１回少年の主張全国大会開催要綱
# ～わたしの主張２０１９～

１．趣　　旨　　少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張全国大会は、子どもたちにとってこれらの契機となることを願い実施するものです。

２．開催日時　　令和元年１２月８日（日）１３時～１６時

３．開催場所　　独立行政法人教育振興機構
国立オリンピック記念青少年総合センター　カルチャー棟大ホール
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町３番１号

４．対　　象　　日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限る。

５．主　　催　　国立青少年教育振興機構

６．協　　力　　都道府県、青少年育成都道府県民会議、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益法人日本ＰＴＡ全国協議会

７．後　　援　　内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

８．主張発表者（出場者）・発表内容

（１）主張発表者　　各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者１名、計47名の中からブロック代表として選ばれた12名が主張発表を行います。

（２）ブロック代表定数　　全国を５ブロックに分け、ブロック毎の定められた出場者数のブロック代表を選出します。
○北海道・東北ブロック：２名　○関東・甲信越静ブロック：３名
○中部・近畿ブロック：３名　○中国・四国ブロック：２名　○九州ブロック：２名

（３）発表内容　　ア．社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ．家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ．テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

（４）発表時間　　５分程度（400字詰原稿用紙４枚程度）

９．表　　彰

（１）全国大会出場者全員(12名)に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員(35名)に同理事長より努力賞を贈ります。

（２）全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。

（３）全国大会出場者全員(12名)に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

～育てよう　未来を見つめる　かがやく瞳～

**青少年育成青森県民会議**

〒030-8570

青森市長島1-1-1　青森県青少年・男女共同参画課内

TEL：017-734-9224

FAX：017-734-8050